

プニアとさめの王さまカイアレアレ　（ハワイ）

むかし、ハワイ島に、さめの王さまカイアレアレが住んでいました。カイアレアレのすみかは、えびがどつさりいる岩穴のそばでした。カイアレアレと十匹の子分たちはいつも目を光させていて、えびを取りに来た人間をつかまえては食べていました。

そのころ、島に、プニアという少年が、いました。お父さんはえびを取りにいってさめに食べられてしまい、お母さんとふたりだけで暮らしていました。お母さんは、毎日、ジガイモを食べながらいました。

「ああ、このじやがいもに、魚かえびをそえて食べられたら、ほんとうにいいんだけれどねえ」

プニアは、なんとかしてえびを取りたいと思いました。

ある日、プニアは、えびのいる岩穴の上に出かけて行きました。海の中をのぞくと、力イアレアレと十匹の子分が眠っているのが見えました。やがてさめたちが目を覚ますと、プニアは大きな声でいいました。

「あれえ。カイアレアレと子分たちは、みんな寝ているな。ようし、岩穴にもぐつて行つて、えびをつかまえて来よう」

それを聞いて、カイアレアレは、子分たちにいいました。

「プニアがもぐつて来たら、飛びかかつて行つて、食べてやろうぜ」

プニアは、大きな石を持ち上げて、岩穴から少しほなれた海の中にドブンと放りこみました。カイアレアレたちは、えびの穴はほつたらかしにして、まっしづらに石の落ちたほうへおいで行きました。そのあいだに、プニアは水にもぐつて岩穴からえびを二匹つかみ、いそいで岩の上にはい上りました。それから、カイアレアレたちにむかつてさけびました。

「おーい。みんなそこにいるかい。一番ざめ、二番ざめ、三番ざめ、四番ざめ、五番ざめ、六番ざめ、七番ざめ、八番ざめ、九番ざめ、十番ざめ。ところで、ぼくにえびのとり方を教えてくれたのは、しつぽの細い十番ざめだよね」

カイアレアレはこれを聞くと、子分たちを一列に並ばせました。数えてみると、みんなで十四いて、十番目のは細いしつぽをしていました。そこで、「おまえだな。プニアにえびのとり方を教えたのは。おまえは死刑だ」といつて、みんなでしつぽの細い十番ざめを食べてしました。プニアは、

「やあい。おまえたち、仲間をひとり食べちやつた」とはやしたてました。そして、えびを持ってお母さんのところに帰り、ジガイモにそえて食べました。

えびをすっかり食べててしまうと、プニアは、また岩穴の上に出かけて行きました。そして、大きな声で、

「あれえ。カイアレアレと子分たちは、みんな寝ているな。ようし、もういちど岩穴にも

ぐつて行つて、えびをつかまえて来よう」といいました。

カイアレアレは、子分たちにいいました。

「プニアがもぐつて来たら、飛びかかつて行つて、食べてやろうぜ」

プニアは、大きな石を海の中にドブンと放りこみました。そして、カイアレアレたちがそつちへおよいに行つているあいだに、水にもぐつてえびをつかまえ、岩の上にはい上がりました。それから、カイアレアレたちにむかつてさけびました。

「おーい。みんなそこにいるかい。一番ざめ、二番ざめ、三番ざめ、四番ざめ、五番ざめ、六番ざめ、七番ざめ、八番ざめ、九番ざめ。ところで、ぼくにえびのとり方を教えてくれたのは、おなかの太つた九番ざめだよね」

カイアレアレは、子分たちを一列に並ばせました。数えてみると、みんなで九匹いて、九番目のは太つたおなかをしていました。

「おまえだな。ニアにえびのとり方を教えたのは。おまえは死刑だ」みんなは、おなかの太つた九番ざめを食べてしまいました。プニアは、「やあい。おまえたち、仲間をひとり食べちゃつた」とはやしたて、えびを持つてお母さんのところに帰りました。

しばらくすると、プニアは、また岩穴の上に出かけて行つて、大きな声でいいました。「あれえ。カイアレアレと子分たちは、みんな寝ているな。ようし、もういちど岩穴にもぐつて行つて、えびをつかまえて来よう」

カイアレアレは、子分たちにいいました。

「プニアがもぐつて来たら、こんどこそ食べてやろうぜ」

プニアは、大きな石を海の中にドブンと放りこみました。そして、カイアレアレたちがそつちへおよいに行つているあいだに、水にもぐつてえびをつかまえ、岩の上にはい上がりました。それから、カイアレアレたちにむかつてさけびました。

「おーい。みんなそこにいるかい。一番ざめ、二番ざめ、三番ざめ、四番ざめ、五番ざめ、六番ざめ、七番ざめ、八番ざめ。ところで、ぼくにえびのとり方を教えてくれたのは、小さな目の八番ざめだよね」

カイアレアレは、子分たちを一列に並ばせました。数えてみると、みんなで八匹いて、八番目のは小さな目をしていました。

「おまえだな。おまえは死刑だ」

みんなは、小さな目の八番ざめを食べてしました。プニアは、

「やあい。おまえたち、また仲間をひとり食べちゃつた」とはやしたて、えびを持つてお母さんのところに帰りました。

こうして、プニアは、岩穴の上にでかけては、えびを取つてかれりました。さめは、いっぴきずつ食べられて、とうとう、カイアレアレだけになつてしましました。

ある日、プニアは、森で一メートルほどの長さの固い木を二本切つて来て、火を起こす道具といつしょにふくろに入れました。そして、ふくろをもつて岩穴の上に行き、大きな

声でいいました。

「ああ、えびが取りたいなあ。もしカイアレアレが、ぼくをガブリとやつても、水にうかんだぼくの血で、お母さんは、ぼくを生き返らせてくれるだろう。でも、もしカイアレアレが、『ぼくを丸』こと飲みこんだら、ぼくはぜつたい助からない」

カイアレアレはつぶやきました。

「ようし、あいつを一飲みにしてやろう」

そのとき、ピニアは、ふくろをもって水に飛びこみました。カイアレアレは、口を大きく開けて、ピニアを一飲みにしました。ピニアは、おなかに入つたとたん、ふくろから一本の木を取り出して、カイアレアレののどにつつかいぼうをしました。カイアレアレは、口を閉じることができなくなつてしましました。

それから、ピニアは、カイアレアレのおなかの中で火を起して食べ物を煮始めました。カイアレアレは、苦しがつて、海じゅうをおよぎまわりました。ピニアはいいました。

「こいつが、ごつごつした岩の岸に行つてくれれば、ぼくは助かるんだけどなあ。草の生えている砂浜なんかに行けば、ぼくはぜつたい助からない」

カイアレアレは、

「ようし、あいつを草の生えている砂浜に連れて行つてやろう」といつて、草の生えている砂浜目がけて、つっこんでいきました。そして、砂の上に乗り上げて、もどれなくなつてしましました。

ピニアは、カイアレアレの口から飛び出して、さけびました。

「おーい、みんな：さめの王さまカイアレアレが、ぼくらの村をたずねて來たよ」

村の人たちは、飛び出して来て、にくいカイアレアをやつつけてしまいました。

それから、ピニアは、毎日、岩穴にもぐっては、お母さんのためにえびをとつて来ました。村の人たちは、悪者のさめがいなくなつて、大喜びしましたとさ。

おしまい

原話：『新編世界のむかし話集10 アメリカ・オセアニア』山室静編著／文元社
再話：村上郁